

カナリヤの詩

CANTUS CANARIARUM

第 147 号
2007 年 7 月 21 日

1p 1997 年の地震 野田成人
2P 上祐さんサイトを見て
元サマナ男性
3P~6P 上祐氏から
前編
7P~11P
宮城刑務所だより
元サマナ男性
12P 大本教-窓口



1997年の地震

2007/7/2 「備忘録」 以下、野田君ブログから抄本。http://alephnoda.blog85.fc2.com/

2007-07-02 小話二つ内憂外患 ◆人を救う宗教？

97年頃の話。ある時、皆が集会で集まっている時に、地震が起きた。震度4位の地震で、建物が結構揺れた。

「お、地震だ！」

と、色めき立つサマナ

「いや、こんな小さいレベルじゃダメだ！！」

(一同大爆笑)

大地震・大災害を心待ちにする宗教。死傷者多数の大災害時に、「ほーら、教祖の予言が当たったぞ、それ見たことか！」とでも言いたい気持ちが…。

しかしなんだな。そういうことを考えていると、みんなに好かれるわけではないな。みんなが被災して困っている時に、嬉々としていたらリンチだな。いや嬉々として無くても危ないかも。関東大震災の時も、「朝鮮人が井戸に毒を投げ込んだ」というデマが流れて、朝鮮人は酷い目に遭った。なんでウチがそうならない保証があるのか？

神様というのは、そういうふとどきものを真っ先に葬り去るんだろうなあ。多分災害なんかの時に…。ああ、神様ごめんなさい。

(野田君乱画)

〔上祐さんサイトを見て〕

こんばんは。先日は会の存在をすっかり忘れ、参加しそびれてしまいました。

上祐さんが新団体を立ち上げたとの報道があり、普段でしたらカナリヤの会報以外は全く教団の情報を取り入れない私も思わず上祐さんのサイトをじっくりと見てしまいました。言っていることは筋が通っていて、よく考えた文章であるという印象を受けました。当時を知らない人なら、好感すら感じてしまうのではないのでしょうか？

でも、自分にはどうしても違和感があり、その違和感がどこから来るものなのかちょっと考えてみました。上祐さんは、A派の信者に対して「グルに対する依存」とあると指摘しています。そして、新しい教団は元代表の教えをすべて破棄して、新しい宗教を作っていくとのことでした。

上祐さんは被害者への賠償や団体構成員の高齢化等の理由を挙げて、自分たちが出家生活（共同生活）を維持することを正当化しています。

しかし、それではグルに依存する代わりに、個々が互いに依存しあって生活している印象を受けてしまいます。人間の成長段階において、まずは依存から「自立」があり、それを達成せずに、宗教的な高みに到達した人がいたとしても、一体誰がその人に敬意を払うのでしょうか？確かに、30代後半、40代、50代になってから、新しい仕事を探し、一人で生きていく（自立）というのは、精神的にも経済的にもとても大変なことだと思います。（ましてや元教団信者ということであれば尚更なのは良く分かります。）

でも、一般社会では、図らずもそのような状況に追い込まれて生活している人は少なからずいますし、そのような状況で自分だけでなく、自分の家族を養っていく人もいます。（抽象的な表現になりますが）個々が依存し合うのではなく、自立した生活を営んだ上で、（その余力でもって）他者を助け合うのが本来の姿ではないのでしょうか？

新しい教団が社会に受け入れられるかどうかを模索するよりも、「個々」が社会に受け入れられるために、「個々」が何をすべきなのかを深く考えた方が、自分たちの宗教的なステージを上げるためにも、社会から受け入れられるためにも、大切な気がします。

スタッフ紹介があり、一通り目を通しました。<http://www.joyus.jp/new-party/stuff/>

殆どの人と面識があり、懐かしく読ませてもらいました。しかし、本人たちは一生懸命考えているつもりなのかもしれませんが、出家という守られた環境の中で、頭の中で考えたことだけを文章にしているせいか、どの内容も似たり寄ったりで、深みを感じることができませんでした。

また、贖罪のためだけに残りの人生を生きるのもちょっと悲しすぎます。以上、思いついたことを書き連ねさせていただきました。夜分失礼しました。---

2007年5月7日 元サマナ男性

「上祐氏からー1」

以下の通り、上祐さんから返事のメールが来ました。

どういうわけか、なぜか、また広末氏からの前振りつきメールであり6月24日でしたが。おって、返事を書きますが、とりあえず、アップします。

斜め字で、「上祐今回→」としているのが、今回の上祐回答の部分です。

ご感想、コメントなどご自由に。

滝本太郎様

6月21日 上祐史浩

ご返答が遅れてしまった点につき、まず、お詫び申し上げます。

遅れた理由としてましては、①新団体の立ち上げ等で忙殺されたこととに加えて、②その後も、根本的な部分において、心を整理して、熟考する必要があったため、とご理解いただければ、幸いです。それでは、以下の通りご返答いたしますので、よろしくお願いします。

なお、今回以降の内容については、滝本様宛個人宛のご返信とさせていただきます、そちらで公開されることはご容赦願います。

ただし、私の方で、ご返答の中で、細かい事実関係は別にして、特にここで以下に書く冒頭の基本的な考え方の部分については、自らサイトに掲示して、自分の考えを発表する必要があることを自覚しておりますので、そのことはご了解下さい。

それでは、さまざまなご質問にお答えさせていただく前に、全てのご質問の背景にある根本的な問題について、私の率直な考えをお伝えしたい、と思います。

そうすることで、全てのやりとりにおいて、私の回答が誤解を与えたり、せっかくご質問をいただいて回答させていただいたことが、本質的には無意味になり、そちらの貴重なお時間を無駄にしてしまう恐れもある、と理解するからです。

これまでの二度のやりとりにおいて、私が本質的な問題であると思ったことは、

「質問7-3の再度一、意見を聞く気があるなら、ここに改めて言いますね。「直ちに団体を解散されたし。」と言った点、「質問7-3-2、私以外にも、法廷での被害者や遺族証言を含めて、多くの被害者が、団体の解散を求めています、知らなかったですか。」といった点、「質問7-3-3、私は「尊重する気はありますか」とも聞いています。これに答えて下さい。」、「質問7-3-4、私は「直ちに団体を解散されたし。」と改めて求めました。尊重してくれますか？」

といった点である、と考えております。

この問いに率直にお答えしない限りは、その他のご質問が、どこかで意味のないものになりかねない、と思います。というのは、各々の質問の意図として、意図の全てではないにしても、その意図の一部として、団体の解散を求める、ということがある、と理解するからです。

このような視点に立って、今現在の私の考えを述べさせていただきます。ただし、これは、私個人の考えであって、ひかりの輪のメンバー全体の考えであるかは別です。とはいっても、

メンバーは同一行動を取っておりますので、多かれ少なかれ、共有している考えではないか、と自分は思います。

まず、私たちが考えている、私たちがなすべき贖罪というものは、過去の犯罪を反省し、その原因を分析し、二度と過去のような犯罪を犯さないことだ、と考えています。

そして、これを言い換えれば、二度と過去のような犯罪を犯さないことを絶対的な条件としながらも、私たちが、今後、宗教や宗教団体を続けるかどうかは、信教の自由、団体結社の自由を認める、この国の市民として、自分たちの自由意志で判断すべきものだ、と考えています。

そして、私たちは、①過去の犯罪の原因を分析し、事件の原因となった松本智津夫に対する絶対的な信仰やそれを支える教義・教材等を払拭し、②二度と過去のような犯罪を犯さないことを決意し、自分たちの独自の教義・教材を展開する新団体を立ちあげました。よって、今後は、この新団体の実践を深めていくことが、自分たちの歩むべき道だと考えております。

私たちは、今後過去のような犯罪は二度と犯さないことを誓います。しかし、ご要望のあった団体の解散という点について言えば、それにお応えすることはできません。

すなわち、私たちが、憲法上の自由と義務を有する日本国の市民として生きていく上で、今後なすべきであると考えすることは、二度と過去のような犯罪を犯さないことであり、ご希望されるような形（＝団体の解散）で、自分たちの信教の自由や団体結社の自由を放棄することではない、と考えております。

まず、基本的な事実として、この団体に所属するものは、基本的に、過去の一連の事件に関与していないか、関与していても、その罪を受刑によって償ってきた者です。

なお、ひかりの輪は、被害者遺族の方々に対する損害賠償を行なわせていただきたい、と考えておりますが、それは、過去の犯罪を二度と起こさない決意の証として、自らの意志としてさせていただきたい、と考えるものであり、ひかりの輪のメンバー全員が、刑事責任があり、法的な損害賠償の義務があったのではないことは、ご存じの通りです。

よって、この日本国の憲法や法規上、日本国市民として、守るべき義務をしっかりと守ることを前提として、日本市民が義務と同時に有する権利を行使しつつ、私たちは生きていく所存です。

なお、私個人の団体指導者としての考えでは、現在の信者・会員が、真の意味で社会に融和するためには、そして、それによって、真の意味で二度とかこのような問題を起こさないためには、過去のように社会を見下すことは厳に戒めなければならないことは当然ですが、同時に、彼らの市民としての憲法上の権利を放棄させることでもない、と考えています。

なぜならば、その場合、いつまでも、信者・会員と他の市民の間には壁が存在し続けてしまい、この社会を自分たちの社会として愛する心、自分たちを他の人たちと同じ日本の一市民である、と位置づけることが難しくなる、と考えています。なお、これについては、最近、近くに住む、ある一般の知り合いの方からも、同じような指摘を受けております。

こうして、私たちが考える被害者の方々の尊重や贖罪とは、二度と過去のような犯罪を犯さないことや、その決意の証としてできるだけ賠償に努める、といったことであって、自分たちなりの価値観に基づいて生きていく、すなわち、宗教的な実践を放棄したり、団体を解

散する、ということではないことをまずもって、率直にお伝えしなければならない、と思います。

最後に、繰り返しになりますが、このことをまず初めに申し上げましたのは、既に二度のやりとりが続いている中で、さらに様々な詳細なご質問をお続けになる背景の一部として（当然全てとは考えておりませんが）、団体の解散を希望されているために、そうされているのではないかと推察申し上げたことがりますので、それが、私の不明であれば、前もって、それについてお詫びいたします。

また、一番最初のお手紙で、過去の事件についてお詫び申し上げると共に、直接お会いしてお詫びしたい旨のお話をさせていただきましたので、私としても、上記のように、自分たちが皆さんの解散のご希望に添えないことを率直に申し上げることについては、多少なりともためらいがありました。

しかし、既に二度のやりとりが続く中で、この点を率直に申し上げておかないことの方が、かえってご迷惑になる、と感じましたので、申し上げることにした、という経緯も付け加えさせていただきます。

それでは、各ご質問にお答えします。

「上祐氏から－２」

滝本－前略、

メールで４月２１日返事をもらっていました。

その返事なり再質問は、少し時間がかかりましたが、下記にメールで改めて送ります。これは、先のメールも私のブログを見られて書かれたということでしたので、５月２日以降の、同じく私のブログに書いておいたもので、その写しになります。

面談して謝罪したいとのことでありましたですね、真に、その気持ちがおありならば、再回答などをまずはお願いします。形ばかりの内容のない再開とうでないこと、すり替え回答ではないことを望みます。ディベートではないのだから。

草々－滝本太郎

----- Original Message -----

From: >To: "滝本弁護士" Sent: Saturday, April 21, 2007 7:13 PM Subject: 滝本様

> 滝本様以下の通り返信いたします。 > 上祐

-----以下が、滝本の返答です-----

滝本 2007/5/2

「上祐さんへ－返答その３（１）」

上祐さん、４月２２日記述の続きです。メールで送るのも良いだろうけれど、メールは、やたら多いだろうからまぎれてしまうと思われ、まあここに書いておくだけにします。で、私の第３回返答です。ほとんどの質問はイエスノーで答えられます。

滝本質問１－自分の関与した犯罪事実と、その他の犯罪事実の覚知

上祐→９５年までの総括は終了。９９年から２００７年までの総括は今現在徐々に

滝本－それだけですか。本当に？少しずつ聞きます。

滝本質問 1-2 総括文によれば、坂本事件について「松本氏は、教団の関与を明言はしなかったが否定せず、それは正しいことであるという立場から私を説得する形となり、最後に、「もうわかっているようだからな」と言い、教団の関与を示唆した。私は、不満はあったものの、松本氏と話した後は、結果として、松本氏に帰依する選択をし、教団を守る広報活動に集中することにした。」というのは、明白に随分と逃げ口上ですね、でなければ卑怯。そう感じませんか。

1-2-2、1989. 11.4の朝の説法は聞いたでしょう？聞いていないならいつ知りましたか？

1-2-3、1989. 11.4以降、上祐さんは、早川ら実行犯がいつまでも帰ってこないのを知らなかったとでも言うのですか？

1-2-4、結果として、じゃあないでしょう。自分の「場」というか「出家したプライド」を守るためだったようにも感じませんか？「真理を極めようとするもの者」だったはずの上祐さんとして、追究しない自分がひどく矛盾していた考えませんか。それともやはり一貫していると思いましたか。

上祐今回→以上のご質問は、自分が坂本弁護士事件について、事前や事後に、その犯行を明確に教えられていたかどうか、というご主旨でお聞きになっているのであれば、事前には、知らされたことはなく、2事後には、明言はされないが示唆はされた、ということが、ありのままの事実です。

信徒向けの説法の中には、宗教教義的な内容はあっても、具体的な事件に対する関与はなく、早川等一部の幹部がいなかったことも、彼らが直接的に事件に関与したことの証明ではありませんし、自分自身は、彼らが、外部の暴力団等に依頼したのではなく、自ら関与したとは、95年まで考えていなかったというのが事実です。

1-2-4のご質問については、今ひとつ正確には、主旨が分かりませんので、お手数ですが、ご説明ください。ただし、教団の事件関与を追求しなかったのは、何故かというご主旨であれば、既にお書きのように、松本氏が、坂本弁護士事件への関与を示唆した後にも、松本氏に帰依して、教団を広報活動によって守るという選択をしたのですから、おしゃっていることと違いないように思います。――――

滝本質問 1-3 上祐さんは、横浜弁護士会（横浜法律事務所と混同していたようですが）に、麻原さんともども、何をいつ、どうやって撒きに行こうとしたのかしら。途中で何があったのかしら。

上祐今回→亀戸での活動をしていたときに、既にお書きのように都心周辺に、車両によって、それを撒く実験に参加したことは、記憶していますが、他の地区に撒いた記憶は、ありません。場合によっては、記憶を失っているだけかも知れませんが、車両で走行しながら、噴霧していくものだったため、単なる一事務所に撒く、といった行為ではなく、その地区一帯に撒く、という行為だった、と思います。

いずれにせよ、亀戸での活動に付随して、散布実験に参加した事実については、散布箇所
の正確な記憶は残っていませんが、否定する意図は全くありません。

148号にのづく

2007.7.9 着

宮城刑務所より.

6月30日付.

①

仙台も梅雨に入りました。これを書いている6月30日はどんよりと曇り。今にも雨が降り出しそうです。

人々は今の季節を「うっとうしい梅雨」と呼びますが、屋外の植物にとっては「うれしい梅雨」、「恵みの梅雨」のようです。試みに、雨の日の草木を外に出てよく観てみてください。そうすれば草木の喜ぶ気持ちを感じ取りることができると違ひありません。

もし、かう梅雨になると気温が^昇上り、真夏よりも暑い太陽に苦しめられます。梅雨の期間の中に6月22日がありますが、この日は夏至（ただし年によって1日ずれる）です。夏至というのは太陽の南中高度が一番高い日のことで、一年で最も強い太陽光を受ける日なのです。この日の前後15日間（合わせて30日間）ぐらいが梅雨ですが、一番太陽光が強い期間を厚い雲で遮って~~く~~くれるのですから、こんなにありがたいことはありません。

何年前のことですが、かう梅雨の時がありました。この時全国各地で断水騒ぎがあり、水不足が深刻な社会問題になりました。仙台では水不足が重大問題にはなりませんでした。毎日が暑いには閉口しました。現在は刑務所にも扇風機が導入されていますが、その当時はそれもありませんでした。しかも職場（工場）の屋根はトタン（金属）でできていたので、太陽熱を全て吸収して部屋の中に伝えてしまいます。無風の灼熱地獄の中で、滝のように流れる汗を拭きながら仕事をしていました。その為、私にとってはうっとうしい

(2)

梅雨ではなく 灼熱地獄から私達を救ってくれるありがたい梅雨なので。

さて、今回は感謝することについて書きます。

「感謝いなさい」とはよく見聞きする言葉です。しかし、この言葉には相手を強制する響きを感じられ、私は大嫌いな言葉でした。そもそも「〇〇いなさい」というのは強制の言葉です。感謝することがどんなにすばらしいことでも、それを強制されては、いい気持ちにはなりません。

母からの手紙によく「感謝いなさい」と書いてあったので、数年前のある日、「じゃ、感謝してみるか」と思い立ったことがあります。

まず、食べ物に感謝することから始めました。私に食べられる動物・植物達は命を犠牲にしているのですから感謝しやすかったからです。次に太陽に感謝しました。太陽は何の見返りもないのに、全ての存在に公平に光をあててくれるので太陽に生かされていると思えるからです。神様・仏様に生かされていると思うよりも太陽に生かされていると思う方が実感があります。神仏の存在を信じていても太陽の方がよりリアルです。さらに、人々(同僚や職員)の中にも私が知らないところでお世話になっているかもしれないと“信じて”、心の中でありがとうと思うことにしました。

このように日々をえ週間程過しました。最初は、「やってみるか」というくらいですから、何の感情も籠っていませんでした。ただやっているだけですから、何の変化もありませんでした。しかし、1週間を過ぎるくらいになる

③

と感情が籠もるようになり、その結果、気持ちがウキウキするようになりました。

これを2週間程で止めたのはウキウキし過ぎるようになったからです。刑務所は生き鳥の目を抜くような人間ばかりの巣窟ですから、地に足が着かない心理状態になると、どんな笑いが振りかかるかわかりません。その為、感謝するという心を心の底に沈めてしまいました（止めたのではなく、心の奥に収納したのです）。

人から感謝されるのは実に気持ちのいいものです。少し恥しい気持ちもありますが、何ヵうれしく楽しい気持ちになります。

私は平成元年1月に成就しましたが、これまでの間ずっと信徒やサマに感謝される立場にいました。このような環境にいたので感謝するよりされる方に習うされたのかもしれません。

感謝する体験を通して感謝されることとするとは、実は同じくらいうれしく楽しい気持ちになれることを発見しました。感謝されると少し、多少恥かしい気持ちになりますが、感謝する時はただうれしく楽しい気持ちになります。

以前は感謝することで相手に主導権を奪われるとか、自分の地位が相手よりも下になるとか、よからぬことが起るとかもしれないというおなバカな錯覚がありました。しかし、実際は感謝したからと言って相手に主導権を取られることはなく、また相手から下に見られるということもありませんでした。むしろ、「ありがとう」と言うことで、相手は気持ちよく私の話に耳を傾けてくれ、助力してくれるようになったのですから、私の方に主

④

導権が転り込んだようなものです。それに、「いい人だ」と相手から見てもらえるようにも感じられました。

感謝されることで気持ち良くなる人は相手にコントロールされるようなものです。相手が感謝していなければ気持ち良くなれないのですから。一方、周りにいつも感謝する人は誰からもコントロールされません。むしろ周りがその人を盛り立て、その人の思い通りになりやすいと思います。それに、気持ちもうれしく楽しい日々を過ごすことができます。

このように感謝することはすばらしいことです。以前、本に「ありがとうは真実の言葉」というのを見かけましたが、そのとおりだと思います。

ところで感謝する一番の根源は何だと思いますか。私は直系先祖への感謝が一番大切だと思います。特に両親は私達を産み育ててくれたのですから、両親を大切にしない者は本当の感謝ができないと思います。

オウムに居た時は両親への感謝を情であり煩惱だと切り捨てていましたが、このような考え方をしている限り感謝することなどできるわけがありません。

オウムの人の中には麻原には恩があり、感謝しているからオウムを辞めたいと主張していますが、麻原に感謝する前に親に感謝するのが筋道だと思います。そもそも麻原に遭えたのはこの世に産んでくれた両親がいたからであり、大抵数人は両親から大切に“蝶よ、花よ”と育てられたはずで、中には両親から大切に育てられなかったという人もいるかもしれませんが、この世に産まれてくれたこと、この一点だけでも

⑤

本当はすごくありがたいことではないでしょうか。それに、ここまで大きくなれたのは誰かの助けがあってこそなのですから、その人達に感謝することもできると思います。

私達は、この世に肉体を持って生きています。だから感謝の根源は両親への感謝だと思っています。「生かしてくれてありがとう」と思えるからこそ、周りが助けにくれることに素直に「生かしてくれてありがとう」と言えるのです。

このような生き方をすればウキウキしてきて、うれしい気持ちイイ人生を過ごすことができます。これは経済的に豊かか否かは全く関係ありません。周りの環境がいいか悪いかも関係ありません（刑務所の中でウキウキできるのですから、これより悪い環境もないでしょう）。全ては感謝するだけでいいのです。

もし私の文章を読んで「のとおり」と思われる場合には、まずは両親への感謝、そして周りへの感謝をやってみてください。それであれば、私の言っていることが本当だとわかることでしょう。

私は「感謝しなさい」は大嫌いです。それよりも、「感謝すると気持ちイイ」と言って終りたいと思います。

了

平田 悟

大本教

2007. 5. 24 ブログ記述を訂正したもの

<http://alephnoda.blog85.fc2.com/>

野田君、
子どもの教育が云々の前に
自分語りを始めるのがいいのではないかなあとと思います。

野田君は、どうしてこんな立場になってしまったんだろう？ってね。
(もちろんカルマの法則なんていわずに)

現在、「邪宗門」を読み始めました。いつか読もうと思っていたのだけれど、落ちつけるようになって読んでます。
ご承知の通り、麻原さんも良く話していた大本教、を題材にした本です。

うーん、その教祖の体験した現世の苦しみ、凄すぎる。
そして麻原さんとはその昇華方向がまったく異なる。

ついでに、上祐さんは、そのまず間違いなく意識している
出口王仁三郎とはあまりに違うなあ、と感じる。
大本教にオウム真理教を重ねるなど、今も残る大本教に失礼に過ぎる。

オウムは悲しいほどにしょもないものでした。
そして、野田君は
「映画はもう終わった」
と、失礼だけれど、伝えられるものではない。

<http://www.cnet-sc.ne.jp/canarium/>

発行 カナリヤの会

〒242-0021

神奈川県大和市中央 2-1-15 パークロード大和ビル5階

大和法律事務所 窓口 滝本太郎 気付

電話 046-263-0130 ファックス 046-263-0375 takitaro@yha.att.ne.jp

横浜銀行大和支店 普通 1343078 カナリヤの会 滝本太郎